報告

令和6年度第1回瀬谷区地域福祉保健計画全域計画推進懇談会

令和6年度第 1 回瀬谷区地域福祉保健計画全域計画推進懇談会を開催しました。

能登半島地震の発生により、日頃の「顔の見える関係づくり」の必要性を私たちは改めて強く意識することになりました。今回は、日ごろからお互いに気にかける「見守り」について、3グループに分かれ意見交換を行いましたので、内容の一部をご紹介します。

テーマ：いざという時に助け合いができる「顔の見える関係づくり」について

日　時：令和6年7月11日（木）　14 時～16 時
会　場：瀬谷区役所　5階大会議室
参加者：学識経験者、地域の各団体、医療関係、学校関係、行政等（18 名）

様々なつながり方の形について

- ゆるくても、つながっていける関係性を作っていくことが、災害時だけでなく日常的な安心感を生む。
- 小さなつながりでも、つながることで何かあった時に助け合える関係になる。小さなつながりを、その地域にあった形でどのように作っていくかが大事。
- スポーツを通して、顔の見える関係づくりをしているが、大きなスポーツイベントは高齢化が進みチームが組めない状況もあるので、小人数でも、障害の有無に関係なくできるものに形を変え、その時々に合わせながら活動している。

各分野に関するご意見

こども・世代間交流

- こども向けイベントは親も来てくれるので、こどもだけでなく親同士のつながりづくりもできる。
- こどものサロンと高齢者のサロンを合体し交流した。また、社会を明るくする運動では、こどもと高齢者で昔遊びをした。交流することで気持ちの共有ができる。こどもにとって楽しいことをするのが大事。

福祉施設・事業所・企業等

- 小売店、薬局等がコミュニティの中にある。そこに人や情報が集まれば、顔の見える関係づくりにもつながっていく。例えば、真夏の暑い日に気軽に行けるクールスポットのような場所が地域にあると良い。
- 福祉施設と地域の交流。日頃から顔の見える関係がないと、発災時の対応につながらない。

自治会町内会

- 自治会町内会から脱退したり加入しない人がいる中で、特に若い一人暮らしの人に、いざという時、助ける側として活躍してもらうことが、これからの課題である。
- 災害時に備え、自治会では、地域の人に対して「自分たちでできることは自分たちでやりましょう」という声かけをしながら自助・共助に向けた啓発の取り組みをすることで、いざという時の安心につなげている。
- 住んでいるまちを、こどもたちの“ふるさと”にしたい。そのために昔からの行事は継続していく。それが、“ふるさと”にするために大切な「人とのつながり」になっているのではないか。

医療・保健

- かかりつけ医を持つことが関係づくりにつながる。また、医師会は地域の講座等に出向くことの相談にも応じられる。そこで医療機関と地域が顔の見える関係になれる。
- 歯科医師は、訪問診療の際の患者、ケアマネジャー、看護師、言語療法士等で、顔の見える関係づくりを推進している。
- 保健活動推進員は、移動販売で集まってきた人に健康チェックを実施。その場で食事のことや家族のことを話してつながりつつ、健康チェックを受けた人が、次回は友人を連れてきて関係性を広げている。

まちづくり・設備整備

- 公営団地に支える（見守る）人などにも入居できるようにし、助け合えるような仕組みにするために、応募条件や選考基準を見直すことも必要。
- 一人ひとりが避難できるように、住宅地の整備、施設に車いすやストレッチャーの備え等、何かあった時にすぐに誰もが使えるようハード面の整備も求められるのではないか。

●今回の懇談会で見えてきたこと

こどもが楽しんで参加できるイベントを開催することが、こどもに地域での繋がりを築いてもらうことはもちろん、保護者として参加された親や祖父母等にも地域に関わることにもつながり、顔が見える関係の第一歩となることが期待されています。

●今後の方向性について

顔の見える関係について、重要性の理解や取り組みが工夫しながら進んでいます。一方で少子高齢化等の問題から今後どのように取り組みを継続し、広めていくかが一つの課題となっています。解決策として多く話題に挙げられた、「こども」を切り口としたアプローチについて検討を進めていきます。

●名和田先生（学識経験者）から

今回の懇談会で、発災時に急に結束力が生まれるわけではなく、普段からの地域コミュニティの力を培うことの重要性が話されました。

・瀬谷区地域福祉保健計画(暮らしやすいまちづくりの計画)
・過去の懇談会の報告書（バックナンバー）